

聖書:サムエル記第二7章1～17節

説教:世継ぎの子を起こす

はじめに

アドベントの第三週を迎えています。旧約の時代、イスラエルの民がどのようにして救い主の到来を待ち望んでいたのか、引き続きサムエル記第二を開きながらを振り返っていきます。前回までのおさらいを簡単にしておきます。イスラエルの王となったダビデは、神の箱を移すという機会を利用して自分の権力を誇るという罪を犯します。その結果、パレードの最中に主の怒りに触れてウザが倒れてしまいます。ダビデはこれを見て悔い改めに導かれ、罪の赦しをいただいたのを知って神の箱の前で裸になって踊りまわり、妻のミカルが恥ずかしいと思うくらい、赦された喜びを身体全体で表していく。こうして無事に神の箱はダビデが住んでいた宮殿のそばに設けられた天幕の中に置かれました。これが前回までのあらすじです。

1 ダビデ

1) 願い

それからしばらく時間が経った頃のことです。ダビデはずっと神の箱のことが気になっています。自分だけ立派な宮殿に住んでいるのに、神の箱は粗末な天幕の中に置かれたままではいいはずがない。なんとかするべきではないか。でも自分勝手な方法でやるわけにはいかないとことは、ウザ打ちの事件から痛い思いをして学んだばかりです。そこでダビデは預言者ナタンに相談をします。

2) 失敗を通してふさわしく整えられる

ダビデから相談を受けたその夜、主はナタンにご自分のご計画を明らかにされていきます。一般に「ダビデ契約」と呼ばれていて、神が救いの計画を明らかにされた特別な箇所です。なぜダビデなのか。主に選ばれた素晴らしい信仰者だったので、このような特別な契約を与えてくださったのでしょうか。主に選ばれた人ですから確かにそのとおりです。けれども思い出していただきたいのですが、ついさきほどダビデは大きな過ちを犯してしまいウザが倒れたばかりです。そこから神がいかに罪に対して厳しいさばきをなさる方であるかを知り、同時に神は罪を悔いる者にたいしていかにあわれみの深い方であるかを学びました。ダビデはあの事件を通してこう告白していました。「私はこれより、もっと卑しめられ、自分の目に卑しくなるだ

ろう。」神の大切な救いのご計画を受けとめるために、ダビデはまずこのように告白するよう整えられる必要があったのです。

2 主が語られたこと

1) 一つの家を造る

では神はどのようなことを語ったのか。今日は三つのポイントを挙げたいと思います。

一つ目。11節後半。「主はあなたに告げる。主があなたのために一つの家を造る、と。」そもそも今回の話しは、ダビデが主のために家を造らなければならないと考えたことが始まりでした。ところが主が語ったのは、逆さまで。ダビデが主のために家を造るのではなく、主がダビデのために一つの家を造ると言われる。これがどのような意味なのかはまたあとで触れることにしましょう。

2) 世継ぎの子

主が語られたことの二つ目。12節。「あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。」ここに世継ぎのことということが出て来ます。たとえば戦国時代、敵の城を攻め落として城主の首を取ることを最大の目標としました。しかし戦いはそこで終わらない。必ず城主の子どもたちも滅ぼさなければなりません。もし一人でも逃げたということになれば草の根分けても探し出す。なぜか。城主の血筋である子どもをかしらにして、お家建て直そうとするだろう。その可能性つぶすためです。世継ぎというのはそれくらい重要視された。

聖書の考えもよく似ています。イスラエルの王位は必ずダビデの血のつながった息子が継いでいかなければならない。イスラエルの王は大きな責任をさまざま担っているわけですが、世継ぎのことも避けて通ることのできない大きな課題です。そんなときに主がこのような約束をあらかじめ語ってくださるのですから、こんな安心なことはありません。

3) 彼を懲らしめる

いま挙げた二つのポイントは、いずれも素直に読むことができると思います。しかし三つ目はどうでしょうか。14節。「わたしは彼の父となり、彼

はわたしの子となる。彼が不義を行ったときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。」前半のことばはとりあえずよいとして、問題は後半のことばです。「彼が不義を行ったときは、（中略）人の子のむちをもって彼を懲らしめる。」普通なら、ダビデに世継ぎの子が与えられる、そこで終わってよいはずですが。ところが続きがあって、世継ぎの子が間違いを犯したなら懲らしめると言うのです。どうしてこのようなことを付け加えるのか。開き直った言い方をすれば、世継ぎの子も人間なのだから多少の間違いを犯すでしょう。ダビデもウザ打ち事件で懲らしめを受けたばかりですから、改めて言われなくても身にしみてわかっていることです。わざわざ伝えなくてもよいことを、ことさらに強調して言うのはどうしてなのでしょう。

4) ソロモンは神殿を建てたが

そこで考えたいのは、主が約束された世継ぎの子とは、いったいだれなのかです。ダビデにはたくさん息子がいました。ところが王位継承の筆頭にいた長男アムノンはアブサロムに殺され、そのアブサロムがクーデターを起こすなどして次々と問題が起きていく。そんな混乱の中でダビデはソロモンを世継ぎに指名していく。このソロモンが神殿を建てるという大事業を果たしていくわけです。そのような歴史の流れをみれば、主が約束された世継ぎの子とはソロモンのことである、とだれもが思い浮かべるでしょう。主が語った約束の内容は、多くの点でソロモンと一致します。

けれども13節後半はどうでしょうか。「わたしは彼の王国の王座をどこしえまでも堅く立てる。」確かにソロモンが王であったとき、イスラエルの歴史の中で最も栄えた時代で大きな争いは起きませんでした。王国の王座は盤石で揺るがないように見え、だれもがイスラエルは永遠に続くのではと思ったでしょう。けれどもソロモンがなくなった途端、イスラエルは北と南に分裂してしまい、やがてアッシリアやバビロンに滅ぼされて国が減んでしまうのです。主の約束は、「どこしえまでも堅く立てる」だったはずですが。約束は果たされなかったのか。人の罪が邪魔をして、神が約束されたようにはいかなかったということでしょうか。もしそうなら、神のみことばは力がない。人の罪の力のほうが強いということになる。そんなはずはありません。確かに人の罪はひどくてどうしようもないほど腐りきっている。けれども、神の恵みのみことばは人の罪をはるかにしのぐ力を

もっているはずです。そうすると「わたしは彼の王国の王座をどこしえまでも堅く立てる」はどう考えるべきでしょうか。

3 イエス・キリスト

1) 卑しくなられる

ダビデは主の約束をどう受けとめたのでしょうか。ダビデはこのあと感激しながら主に祈るのですが、その中の19節後半にこうある。「あなたはこのしもべの家にも、はるか先のことまで告げてくださいました。」「はるか先」と言っていることに注意してください。このときソロモンはまだ生まれていませんから、ダビデにとってはるか先だとも言えなくもありません。けれども、ダビデがウザ打ち事件から学んだことはなんだったのか。繰り返します。6章22節。「私はこれより、もっと卑しめられ、自分の目に卑しくなるだろう。」自分もそうだけれど、自分の後に続く者も卑しくされていく。それがイスラエルの王の姿なのだと教えられました。ダビデは、自分の身内のことを考えていたではありません。はるか先に来ようとされている救い主、卑しい姿となって来られる救い主を見ていたのではないか。

2) 懲らしめを受ける：十字架

そのように考えればすべての辻褄が合います。二つ挙げることができます。一つ目。14節後半。

「彼が不義を行ったときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。」もちろん主が不義を行ったわけではありません。私たちの罪である不義を引き受けてくださり、不義ある者の姿となられ、父なる神の手によって十字架で懲らしめを受けられました。14節は、イエス・キリストの十字架を指しています。

3) とこしえに立つ王国：天の御国

二つ目。ソロモンの王座は途中で崩れ去り、とこしえに確立させることはできませんでした。けれども主イエス・キリストは、三日目によみがえられて天に上り、私たちが向かうべき天の御国を永遠にわたって確立してくださいました。とこしえにということばは単なる飾り文句ではありません。死に打ち勝たれた方が与えてくださる復活のいのちの約束がここに 있습니다。

イスラエルはこの約束を聞き、ダビデの末から生まれる救い主をおよそ千年にわたって待ち望んでいたのです。私たちもこの約束を待ち望みたいと願います。